

短期大学における英語基礎力の新しい傾向について

中島 直樹

1. はじめに

平成16年4月、城西大学女子短期大学部において英語力調査（プレースメント・テスト）が実施され、外国人留学生を除く43名の女子短期大学部新入生が受験した（経営情報実務学科33名：現代文化学科10名）。近年、短大を取り巻く環境が大きく変化し、それに伴い様々なタイプの学生が入学するようになった。学生の英語力にも多様化の現象が見られ、ある程度基礎力のある学生とあまり基礎力のない学生との差が以前より大きくなったように感じられる。そのため、実際の授業に入る前に学生一人一人の英語力がどの程度であるかを教員サイドがあらかじめ認識しておくことがより必要になった。また、その調査結果を基に、一年次の英語の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B（TOEIC のリスニングセクションに重点を置いた演習）と TOEIC イングリッシュ I C・I D（TOEIC のリーディングセクションに重点を置いた演習）を能力別のクラス編成にして、これまで以上に授業の効率化と学生のレベルアップを図ろうというねらいで、数年前から新入生全員に対して実施されている。

本論は、本年度学生の英語力調査の結果を、昨年度あるいはそれ以前の学生のそれと比較することにより、本年度に入学した学生の英語力がこれまでの学生とどう違うのかということを検討すると共に、一年後の最終授業時に前回と全く同じ条件で同じ試験を実施して、どれだけスコアが伸びたかを調査し、本学学生の英語力の特徴を明らかにしようとする試みである。

2. 年度および前々年度の結果について

まずはじめに、前々年度（平成14年度）の英語力調査を振り返ってみたい。出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験であった。平成13年度以前の調査とは試験問題が違うため、その年度以前の新生とは単純には比較することはできない。受験できなかった学生もいたが、新生のほとんどにあたる93名が一斉に受験した。全体の平均点は約56.9点であった。学科別の受験者数と平均点は表1の通りである。

表1 平成14年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	67名	約57.8点
現代文化	26名	約54.7点
全 体	93名	約56.9点

平成14年度より、それ以前と比べ少しやさしい試験問題を新たに作成し、採用した。年々、学生の英語基礎力が低下し、平均点が30点台に低迷するようになり、試験としては難しすぎると判断したためであった。それ以前との単純比較はできなくなるが、これにより学生の英語力の差が鮮明に表れるはずである。

平成12年度には文学科に英米文学専攻があったためか経営学科よりも文学科の平均点の方が高かった。この傾向は平成13年度にも続き、経営情報実務学科約35.3点、現代文化学科約36.0点(旧問題)と僅かに現代文化学科の平均点の方が高かった。しかし、平成14年度は経営情報実務学科の平均点の方が高い結果となった。このことは実際に授業を担当していても感じられたことであったが、それが数字の上にも表れた結果になった。

実際の得点分布を見てみると、13年度のそれよりもかなり大きな広がりを持っていることが分かった。90点以上のかかなり基礎力のある学生が6名、次いで75点から89点までのある程度基礎力のある学生が10名、29点以下のほとんど基礎力のない学生が7名おり、その中間に30点から74点までの中間層があった。しかし、よく見るとその中間層の中にもいくつかの山があった。60点から74点までの上位の層(26名)と45点から59点までの中位の層(24名)と30点から44点までの下位の層(20名)とにおおよそ分類でき、この3つの層が14年度の女子短期大学部新入生に占める割合は実に75パーセントを超えていた。

次に、昨年度(平成15年度)の結果について見てみたい。59名の新入生全員が受験し、全体の平均点は約54.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表2の通りである。

表2 平成15年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	47名	約55.0点
現代文化	12名	約52.6点
全 体	59名	約54.5点

前々年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては2.8点、現代文化学科においては2.1点、全体では2.4点下がっていた。また、昨年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学

科のそれより高い結果となった。

昨年度入学生の英語力の特徴は、得点分布の中に表れていた。受験者数の減少のため、得点分布グラフの形にある程度の変化は見られたが、基本的には前々年度とそれほど変わってはいなかった。しかし、前々年度と違う点は、90点以上のかかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（前々年度は6名）ことと、中間層とされてきた領域の形が逆転したことであった。30点から74点までの層を中間層とした場合、そこにはいくつかの山があることが前々年度の検証で分かっていた。そして、前々年度は60点から74点までの上位の層に26名、45点から59点までの中位の層に24名、30点から44点までの下位の層に20名の学生がいて、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、昨年度は上位の層に16名、中位の層に17名、下位の層に17名と、中間よりやや下に比重が移ってきた。

3. 今年度の結果について

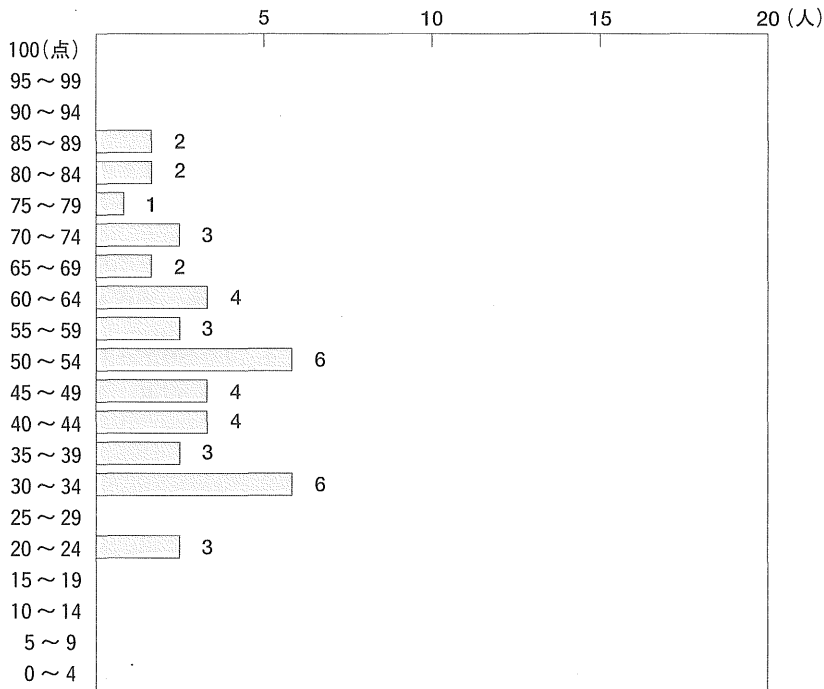
今年度も昨年度と同様に、出題形式は全問マークシート方式、試験時間は一時間、全50問で100点満点の試験とした。平成12年度からの同一問題を使用しているので過年度との比較が可能である。外国人留学生を除く43名が受験し、全体の平均点は約50.5点であった。学科別の受験者数と平均点は表3の通りである。

表3 平成16年度英語力調査結果

学 科	受験者数	平均点
経営情報実務	33名	約50.5点
現代文化	10名	約50.4点
全 体	43名	約50.5点

昨年度の平均点と比較すると、経営情報実務学科においては4.5点、現代文化学科においては2.2点、全体では4.0点下がっている。平成14年度からの全体の平均点の推移を見てみると、14年度：56.9点、15年度：54.5点、16年度：50.5点と年々低下の一途をたどっている。短大に入学してくる学生の英語基礎力が徐々に低下していることを如実に示している。残念ながらこの傾向はデータを採りはじめた平成12年度からずっと続いている。また、昨年度も経営情報実務学科の平均点の方が現代文化学科のそれより高かったが、この傾向も今後しばらく続いていくことが予想される。

次に、全体の得点の分布を見てみることにする。100点を5点刻みに分け、それぞれの得点層に何人の学生が分布しているのかを表したのが次のグラフである。



今年度の学生の得点分布はこのようになっている。グラフの形は、基本的には昨年度とそれほど変わってはいない。昨年度の分布をほぼ継承していると言ってよいであろう。残念なことではあるが、90点以上のかなり基礎力のある学生がひとりもいなくなった（前々年度は6名）ことも、中間層とされてきた領域の形が逆転したことも昨年と同様である。それに加えて、今回は75点から89点までのある程度基礎力のある学生が5名となり、昨年より3名減少してしまった。Aクラスといえども、今まで以上に絶えず基礎を確認しながら授業を進めなければいけない状況になってきている。中間層の中を詳しく見てみると、60点から74点までの上位の層に9名、45点から59点までの中位の層に13名、30点から44点までの下位の層に13名の学生がいる。前々年度までは、得点層が上位になればなるほどそれだけ学生数も多かったが、昨年度から中下位に比重が移ってきており、その傾向は今回も続いている。良いとは言えない本学の新しい傾向であるが、そのことが年々、平均点を下げている最大の理由であることは明らかであろう。

4. 今年度のAクラスの結果について

今年度もこの調査結果を基にして、一年次の英語の必修科目である TOEIC イングリッシュ I A・I B と TOEIC イングリッシュ I C・I D を3段階の能力別のクラス編成にした。56点以上をAク

(2) A : Excuse me. Can you tell me the way to the post office ?

B : Sure. () straight down the street. It's on the right.

1. Break 2. Catch 3. Go 4. Put

1 番も 2 番も短大で勉強を行うのに必要な最低限の基礎力が備わっているかを見るために出題し、80%を大幅に超える正解率を期待していたので、この結果には残念であった。昨年はこの2題の正解率は80%半ばであった。今年の学生の方が基礎力に欠けていることがよく分かる。

(10) A : I don't know () Central Park is.

B : It's not far. I'll show you.

1. who 2. when 3. where 4. whose

昨年は81.9%の正解率であった。不正解者の多くが2を選んでいたので昨年と同じ。

(42) どこでそんなに素敵なコートを見つけたのですか。

Where (① a ② you ③ did ④ such ⑤ find ⑥ nice) coat ?

1. _⑥_⑤_ _ 2. _①_④_ _ 3. _②_④_ _ 4. _③_⑤_ _

これも疑問文の基本的な形であるが前年度とほぼ同じ正解率にとどまった。前々年度の正解率は80.6%であった。

正解率が75%を超えていたのはこの6題のみであった。

反対に、最も正解率の低かった問題は18番の

(18) If it () tomorrow, I'll probably stay home and read.

1. rainy 2. rains 3. raining 4. to rain

であり、正解率は18.6%と低かった。不正解者は1と3に大きく分かれた。be動詞がないのに主語itの後ろに直接形容詞をつなげたり、ing形を続けたりする基礎力不足が目立つのは昨年と同じ傾向である。この問題は昨年度も最も正解率が低かった。

次に正解率の低かった問題は26番の

(26) Be kind () old people on the train.

1. at 2. to 3. of 4. from

であり、正解率は20.9%であった。6割以上の学生が選択肢3のofを選んでいたので毎年、同じところを同じように間違っている。

英語基礎力を試すために出題した8番であったが、これも27.9%の正解率であった。

(8) Mr. Harada went to Kenya () pictures of African animals.

1. takes 2. took 3. taken 4. to take

7割以上の学生が不定詞の基本的な使い方を理解していないという信じられない結果が明らかになっている。選択肢1, 2, 3を選んだ学生はだいたい均等にわかれている。

同様に基礎力を試すために6番の出題をした。

(6) A : This is a report () I wrote in Japanese yesterday.

 Could you check it for me, Jiro ?

B : OK, Laura.

1. which 2. when 3. who 4. whose

関係代名詞を習得しているかを問う基本的な問題であるが、正解率は4割にも満たなかった。3人に1人が2の when を選んでいた。yesterday という言葉に引きずられたのであろうか。

1番から35番までは基本的な文法・語法、36番から40番までは会話、41番から50番までは日常的な作文の力を見る出題をした。文法・語法については基礎力に不安を感じたが、対話の問題や日常的な言い回しをやさしい英語で並べかえる問題は全体的に良い結果であった。このことは昨年とほとんど変わっていない。これも最近の学生のひとつの傾向になっている。

6. おわりに

最後にもう一度、全体の調査結果を振り返り、今後の英語教育の指導について考えてみたい。本学の特徴は基礎力のある学生とほとんど基礎力のない学生との中間の学生が非常に多いということである。これは従来から変わっていない。しかし、その中間の層は昨年度から形を変え始め、どの層にもほぼ均等に学生が存在するという形から、中下位に比重のかかった台形的な形に移行した。今年度はこの傾向がより強まったとすることができよう。つまり、最上位と最下位を除くあらゆる層にほぼ同数の学生が存在しているのではなくて、中位よりやや下に多くの学生が集中しているのである。このことが最近の本学の大きな特徴であろう。90点以上のかなり基礎力のある学生が昨年度からいなくなってしまったのは残念であるが、75点から89点までのある程度基礎力のある学生の層は、少数ながらもまだ残っているので、一つでも上のレベルに到達できるよう短大入学後に何とか鍛え上げ、少しでも英語力をつけさせられるような指導をしていきたい。